

疎開する朝に被爆

今から71年前の1945年8月6日、広島市に原子爆弾が落とされました。私は国民学校1年生、6歳の時に爆心地から2・5^{キロ}の地点で被爆しました。

日本は、第2次世界大戦で国民全員が苦しい生活を強いられ、戦争が終わる日を心の中で祈り続けていました。「戦争を止めて」と言葉にできない時代でした。父は、戦争に行き病気で亡くなり、祖母、母、10歳の姉、8歳の兄、6歳の私、3歳の弟の6人家族でした。戦争が激しくなり食べ物にも困る毎日、8月6日のお昼に田舎の親せきを頼って疎開することになりました。6日の朝は、戦争中とは思えないくらい静か

〈26〉 被爆体験の証言活動を続けて



腹話術で講演する小谷孝子さん

千葉県八千代市 小谷孝子さん(77)

で真っ青な空でした。お昼まで、裏の川で泳いでようと、きょうだい4人でかけ出しました。その時、青い空に飛行機の音が聞こえました。すぐに遠ざかったので、また4人でかけ出しました。

「お水おいしいね」と弟が

私は水が飲みたくなくなり、家に帰り、台所で水を飲んでいたら、ガラス窓が「ピカッ」と光り、ものすごい音と同時に家

がつぶれ、下敷きになりました。どのくらいだったか、母に助けられました。

幸いかなり傷でしたが、私の目に入ったのは、さっきまでとは全然違つ、まるで地獄に落とされたような光景でした。

外にいた姉は熱線で全身やけど、兄は家の陰にいて熱線は浴びなかったが、飛んできたガラスが頭に刺さり傷だらけ。弟も祖母も熱線で全身やけどを負い、虫の息でした。市内は火の海で裏の

橋を渡って逃げてくる人は幽霊のように皮膚と布切れが垂れ、6歳の私に「水ください、水ください」とみんなが手を出します。ショックで立ちすくんでいました。

8月10日、意識のなかった弟が目を開けました。母が水を含ませるとおいしそうに一口飲んで、「おかあちゃん、飛行機おそろしいね、お水おいしいね」と一言残して3歳で亡くなりました。

やさしかった母も

8月15日、終戦を迎え

証言を朗読で広げたい

被爆者の高齢化で、被爆証言をする人が減少しています。「朗読活動にすれば若い人たちに継承できる」と、千葉県原爆被爆者友愛会では多くの被爆者の体験を集め朗読台本を作り出した。みなさんにぜひ使っていただき、「核兵器のない世界」を訴えてもらいたいと願い、千葉のピース・フ

ました。学童疎開に行っていた子どもたちが帰ってきました。しかし、ほとんどの子が、親を亡くし原爆孤児になりました。やけどやけがをした人と孤児の収容所が、瀬戸内海の似島にできました。母は家族の世話で忙しい中、島に渡っては孤児の世話をしていました。「よその子の世話をせんと、私の世話してよ」と健康な私はいつも一人ぼっち。「わがままをいんさんな、夜にはお母ちゃん帰ってくるでしょ。あの子たちは、なんぼ待っても、親は帰ってこんのよ」。優しかった母も、6年後「白血病」で亡くなりました。

母が亡くなってからは、被爆者であることを隠してきましたが、これから生きる若い人たちに同じ思いをさせないため「核兵器廃絶」を訴えて証言活動を続けています。

☆朗読台本『伝えたい あの日のことを』1部200円(送料別) 千葉県原爆被爆者友愛会TEL・FAX 043-1253-7768

いま伝えたい

被爆者から